新潮社
日本現代文學全集

谷崎潤一郎集

（一）

（一）

日本現代文學全集・講談社版

谷崎潤一郎集

(一)

日本現代文學全集
43
谷崎潤一郎集 (一)

編集
伊藤 整
龜井勝一郎
中村光夫
平野 謙
山本健吉

昭和35年10月1日 印刷
昭和35年10月5日 發行

定價 450圓

© KŌDANSHA 1960

著者 谷崎潤一郎

發行者 野間省一

印刷者 北島織衛

發行所 株式會社 講談社
東京都文京區音羽町3～19
電話大塚大代表 (941) 3111
振替 東京 3930

印刷 大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷 株式會社 興陽社
製本 和田製本工業株式會社
製函 株式會社 岡山紙器所
背革 厚川株式會社
表紙クロス 日本クロス工業株式會社
本文用紙 本州製紙株式會社
函貼用紙 安倍川工業株式會社
見返し用紙 三菱製紙株式會社
扉用紙 神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかへいたします

谷崎潤一郎集　目次

卷頭寫眞

筆　蹟

誕　生……五

刺　青……一一

幇　間……一五

小さな王國……二四

痴人の愛……四〇

蓼喰ふ蟲……一六三

卍（まんじ）……二三八

盲目物語……三一七

武州公秘話……三六三
春琴抄……四二九
青春物語……四五七
作品解説……伊藤　整　五〇〇
谷崎潤一郎入門……瀬沼茂樹　五〇五
年　譜……五一三
參考文獻……五二四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

谷崎潤一郎集

（一）

銀婚式の日尓　　冠一沖

えすまあるもて君と浪速てあ生れ
松も陸にけ李三十まり五ゆゝせ

誕生　一幕

一條天皇の寛弘五年九月十一日朝、京都藤原道長邸に於ける出來事とす。舞臺中央に華麗なる土御門寢殿の建物ありて、其の兩側の簀子より對屋に至るべき渡殿の一部、翼の如く左右へ突き出づ。寢殿正面の簀子より庭へ下りる階の左右に、さゝやかなる梅樹各一株、庭上處々に菊其の他の草を植う。殿上悉く格子をとざし、四隣寂寞。唯庭にすだく蟲の音に紛ひて、室内より多人數の讀經の聲々。鈴を振る響など洩れきこゆ。

年若き女房二人、（以下登場の公卿女房達は、宮中御產の古式に則り、白無地の服裝を用ふるものとす）ねむたげなる顏して妻戸の中より現れ、一人は階に腰うち掛けて、一人は勾欄の下にうづくまりて、眼脂を擦りつゝ空を仰ぎ見る。

女房の一　おゝ、いつの間にか空がしらんで參りました。もう程なく夜明けでござりませう。

女房の二　此のまあ、朝風のひや〳〵と吹き入る心地好さ。込み合うたお局の人いきれで蒸された頭が、一時に冴え〳〵とするやうな。

女房の一　暫くお靜になさりませ。前栽にすだく蟲の音が、何處からともなう、ぢいぢいと聞えて居るではござりませぬか。

女房の二　如何さま此處にかうして居りますと、あの御讀經のこゑごゑや、陰陽師の振る鈴の音までが何となく蟲の音のやうに哀れが深う覺えまする。

女房の一　それはさうと、后の宮には疾うに御產氣づきながら、あのやうに、五壇の御修法やら、不斷の御讀經やら、山々寺々の大德、いみじき修驗者の數を盡して御祈禱遊ばす効もなく、未だに御產を遊ばさぬとは、どうした事でござりませう。

女房の二　ほんに、ほんに、御產の苦しみは上つ方も下々も同じ事とは申しながら、后の宮はまだいたいけな十二のお歳に御入內遊ばし、今年やうやう二十を一つお越し遊ばしての御初產。勿體ない、あの花のやうなあでやかなお身で、このやうに御惱み遊ばすかと思へば、いたいたしうてなりませぬ。其の代り、めでたく玉のやうな男皇子をお產み遊ばして御覽じませ、やがて帝の御位にそなはり給ひ、后の宮は云はずもがな、お父君の大殿の御威光も天が下に輝き渡るは知れたこと。

女房の一　さあ、ならう事なら男皇子をと誰しも願うて居りますが、女皇子やら男皇子やら今の中から判りませぬ。

女房の二　何の其れが今から判らいでか。今日此頃の大殿の御運の强さを御覽じませ。去ぬる長德の流行病に御兄君はお二人ながらお薨れ遊ばし、又御甥の內大臣伊周樣や中納言隆家樣は大宰府へ流され給うたに、大殿ばかりは愈ゝ榮え時めかれるではござりませぬか。この勢では必定男皇子が御誕生遊ばすでござりませう。

女房の一　さうなれば願うたりかなうたりでござりますが、お家の榮華が目ざましいにつれて、妬み羨む人達の呪詛禁厭も多いわけ。それ、いつぞや承香殿の女御樣は、御產の時に物怪に强う祟られて、淺ましい、皇子とも何ともえたいの知れぬ水のやうなものばかりを、お產みなされたと云ふ事ではござりませぬか。

女房の二　ゑゝ、まあとんでもない。其のやうな不吉な事は仰しやりますな。

女房の一　でもあの昨夜から、生靈死靈の乘り移つた女房達の、罵り叫ぐ言葉をお聞きなされましたか。其れは〳〵背をつり上げ、髮を振り亂し、眞斧になつて后の宮や大殿の御身の上を呪ひ叫ぶ樣子と云つたら、身の毛がよだつやうでござりまする。

女房の二　どれ程强い惡靈でも、大殿の御威光や、修驗者たちの法

力には、抗はぬ事でござりまする。そればかりか后の宮の御體の内には、やがて日本の天下を知ろし召す、帝の玉體がお宿りなされてゞござりますもの。

女房の一　したが后の宮や大殿を、御母上御祖父にお持ち遊ばして、御誕生遊ばす日の皇子の、前世はどんなであつたやら……

道長の息藤原頼通、下手より現れる。當年十七歳の男盛り、元氣よき聲にて、「此の殿はうべも富みけり、さきくさの、あはれ、さきくさの、はれ、さきくさの、三葉四葉の中に、とのづくりせりや、殿造りせりや。」と歌ひつゝ庭中を歩み來る。

女房の二　若殿で居らせられまするか。

頼通　（勾欄の下に近寄り、女房を見上げながら）　おゝ女房達か。や、其方は今迄いぎたなく居睡りを致して居つたと見える。

女房の二　何と仰せられます。又お嬲り遊ばすのでござりませう。

頼通　でもあの末摘花のやうに、鼻の端を赤くして、幸賢苧蔴の乘物に似て居るではないか。あはゝゝゝゝ。

女房の二、周章てゝ鼻を袖にて隱す。

頼通　して、其方達は其處で何を致して居るのぢや。

女房の一　あまり局の中が苦しうございます故、暫く朝風に吹かれうかと存じまして。

頼通　うむ、麿も昨夜一夜御產屋に侍らうたが、どうやら睡うて堪へられず、睡氣ざましに築山の紅葉を見ながら、逍遥して參つた。どうぢや、后の宮には未だ御產の御景色は見え給はぬか。

女房の一　はい、何分にも數々の、御物のけの惡靈が、容易に退散致さぬ樣子でござりまする。

女房の二　されば大殿には御坊たちと諸共に、法華經を一心不亂に誦んじ遊ばし、殿の上にもいつになく、御眼に涙を浮ばせられてでござりまする。

女房の一　若殿も早う御產屋へ入らせられて、御父上と御一緒に、御念誦遊ばしたが宜しうございます。

女房の二　若し男皇子が御誕生遊ばして、やがて帝とならせ給ふ曉には、若殿も帝の御叔父君とて、天下に御威勢を張らせ給ふことでござりませうが。

頼通　いや、其れよりは、麿は近々に妻を娶つて、美しい后がねの姫を儲けるわよ。

女房の一　おほゝゝゝゝ。それはおめでたう存じまする。そして若殿をお婿取り遊ばすのは、何れの姫君でござりまする。

頼通　麿が戀人は誰ぢやと思ふ。中てゝ見い。

女房の一　それを妾共が存じませぬ事か。あの具平の親王の一の姫宮でござりませうが。

頼通　いや、いや。

女房の二　おほゝゝゝ。若殿とした事が、今更お隱し遊ばしても詮ないこと。

女房の一　早う大殿のお跡をお繼遊ばして、攝政關白の御位に經上りたまひ、下につながる妾共まで御威光にあやかる事が出來ますやう、今のうちからお願ひ申して置きまする。

女房の二　嘘似つかはしい攝政關白におなり遊はすことでござりませう。

頼通　したが、麿の女が入内して、可愛い皇子を產ませらるゝ頃ほひには、其方達はもう老い惚けて、九十九の嫗となり申すわ。

女房の一　あれまあ、又してもお口の惡い。隨分と命丈夫にながらへて、御榮えの末々までも、お眺め申し上げたう存じまする。

鷄鳴兩三聲、四面いよ〳〵明くなる。

頼通　もう曉になつたやうぢや。どれ、隙つぶしに女房達の局へ參つて、紫式部に源氏の物語でも聞かうかよ。

女房の二　もし、若殿、あんまり日本紀の局殿（紫式部のあだ名）へお親しうなされますな。たとへ骨肉のおん仲でも妬み嫉みはよく

ある事。

頼通　はて、其れは何故にな。

女房の二（小聲になり）それでは御存知遊はしませぬか。大殿には どうやら彼のお局殿へ、人知れず思ひをお寄せなされてゞござりまする。

頼通　ほう、これは耳寄りな。はて、さて、内の大殿は、父上ながらいみじき好色であらせられるわい。

女房二人　おほゝゝゝ。

頼通の弟せや君（後の教通にして、當年はいまだ十三四歳の童姿）妹威子（八九歳、後の後一條天皇后）の兩人、少納言の乳人に手をひかれ、末の妹嬉子（三四歳、後の後朱雀天皇后）小式部の乳人に抱かれて、廊殿の簀子傳ひに出で來る。

せや君　兄上、兄上、どのやうな皇子がお生れなさつた。

頼通　や、皆參つたか。まだ御誕生の御景色がない。

少納言　それは〳〵。きついお惱みの御樣子と見えました。

女房の一　さればでござりまする。先刻妾共が御產屋を退り出づる頃ほひは、おん物怪の勢凄じく、諸山の御坊陰陽師の方々、念力を凝めて一心不亂にお祈りの最中でござりました。

小式部　さりながら、御物怪のねたみそねみは、畢竟御立派な男皇子の御誕生遊ばす瑞祥と申すもの。

威子　兄上樣、妾は御產所の樣子が見たうてならぬ程に、伴れて行つて下されや。

少納言　幼い方々は、御產所などへ入らせられるものではござりませぬ。

小式部　局へお出で遊ばして、兄上樣と御一緒に繪卷物なと御覽じませ。

威子　妾も早う后の宮になりたいものやなう。

少納言　其のお氣遣ひには及びませぬ。仰せがなうても必らずお父上が后におさせ遊はすでござりませう。

道長の聲（寢殿の中より）これ誰ぞある。格子を殘らず取り拂うてくれい。

女房多勢の聲（寢殿の中より）畏りました。

皆々立ち上りて、殿上の上下の格子を悉く取り外す。寢殿此間の西側（寢殿は南面せるものと知るべし）には、僧侶陰陽師修驗者達十人、北向きに各壇上に坐を構へて、或は護摩を焚き、或は經を讀み、專念に加持祈禱す。東側には、上達部殿上人、上臈中臈の女房達、老いたるも若きも立錐の地なき迄に入り交り、僧侶の讀誦につれて數珠つまくりつゝ、一齊に額をつく、御產所に宛てられたる母屋は御簾垂れたれば見えわかず。西の廊殿の局には、大威德明王の軸の前に護摩壇を据ゑて、一人の大德頻に護摩をたく。

左大臣道長、歳の頃四十前後の大兵肥滿の男、隻手に數珠を持ちて寢殿の簀子に立ち出づ。

威子　あれ、父上樣が見えられた。

せや君　おゝ、父上、まだ御產はござりませぬか。

兩人道長の傍に馳せよる。

道長（兄妹の頭を撫でゝ微笑みながら）和子達はいつの間に參つたのぢや、いまだ御誕生遊はさぬ程に、靜に致して居るがよい。

威子　父上樣、いつ妾を后にして下さります。

道長　ほう、面白いことを申すなう。大人しうしてさへ居れば、やがて后にして進ぜよう。

威子　でも二人の姉上樣が、帝や東宮樣のお后にならしやつたからは、妾を后に持つお方がござんせぬ。

道長　あはゝゝゝ、その氣遣ひには及ばぬ事ぢや。

威子　それでは、今度男皇子が御誕生なされたら、其方樣の后にして下さりませ。

道長　ふむ、宜し、宜し、幼うても其方は中々賢い娘ぢや。其方の

やうな姫達を數多儲けた此の父は、いみじき幸福者ぢやわい。

宮の大夫齊信、母屋の御簾を排して現れ、庇間の群衆を分けつゝ、倉皇として道長の許に馳せ來る。

齊信　大殿へ聞え上げまする。

道長　おう何事ぢや。

と云ひつゝ、子供の手を振りほどきて、心配さうに齊信を見る。

齊信　もはや程なく御誕生あるべきなれど、何樣おん物怪に遮へられて、いみじき御惱みの御樣子故、萬々一の事ありてはと、觀音院の僧正がすゝめに從はせられ、御頂の御髮落させたまひ、御受戒遊ばす所にござりまする。

道長　なに、御戒言を受けさせらるゝか。

齊信　はゝッ。唯今僧正が受戒の詞を讀み上げられまする。

列み居る僧俗一同、讀經をやめて謹聽する時、母屋の中にて僧正聲高らかに受戒の詞を朗讀す。

僧正の聲　あはれ鳳曆は霜幾くならず、玉顏も涙未だ浸さずおはしますを、菩提の御意の發し給ひけるこそは、貴きものから、悲しくぞ覺えける。髻を自ら落し給ひし悉達太子の昔を思ひやれば、檀特の山は跡暗うして、見て、悲しむ人少くこそありけれ。戒を人に受け給へる、國母の今を見奉れば、日本の國は擧りて恩を惜む繁かりけり。いでや今日こそは五戒を悉く持ちおはしませ。苔を穿たぬ輕きおん歩み、蓮にうけて傾かずぞ候ふ可かりける。千葉花臺の舍那、百億蓮葉の釋尊。諸共に百年の戒を守り給ひて、九品蓮に昇り給へ、聞き給へ。御功德限あらず。法界の衆生迄普く及ばむ。

道長　大夫、あの僧正の詞を聞かれい。まだうら若い御身空で、畏くも、いみじうも思し立たれたりな。さすが天下の國母と仰がれ給ふ后の宮の、御心勞はまた格別。あまりの忝さに、この道長は泣き申した。

齊信　御傷しう存じまする。

道長始め、皆々感極つて落涙す。

せや君　あれ父上がお泣きなされた。

威子　御誕生はおめでたいものぢやと云ふに、父上樣始め、皆々何が悲しいかや。

道長　さうぢや、さうぢや、不吉な涙は流すまい。どれ、父も御枕邊に侍つて、法華經を誦んじ申さう。和子達は乳人と一緒に、暫くあちらで遊んで居れ。

兄妹顏きつゝ乳人に伴はれて退場。母屋の御簾しづしづと卷き上る。東寄なる濱床に帳臺を据ゑ、御產婦の中宮（道長の出にして一條帝の中宮たり。御諱は彰子、上東門院と稱せらる）南枕に肩衾をあてゝ打ち臥し給ひ、今しも餘慶僧正、剃刀を以て御頂の御髮をほんのわづかばかり剃り落す。（剃り落されたる後は、東北南三方の帳を低く垂れて、濱床を隱し奉り、幕の終る迄中宮の御姿は帳の中にありて見えざる事とす）帳臺の東側には、產棚、おし桶、胞衣棚を置く。帳臺の西、御枕許には、道長、餘慶僧正と共に法華經を讀み、道長室倫子、年老いて物馴れたる女房二三人居列びて、御產婦の介抱につとむ。そのうしろ、北側の壁に沿うて立て連ねたる屏風の前に、物怪、惡靈の乘り移りたる招人の女房五人髮振り亂し、眼中血走り、夢中になりて何やら口早に罵りつゝ荒れ狂ふ。修驗者數人、物怪の一群を圍繞きて、鈴うちならし、呪文を唱へ、頻に怨敵退散の祈願を凝らす。

招人の一（暗內殿女御惡靈）　あた妬や、呪々しや、妾こそは栗田關白が女、御匣殿の生靈なるぞや。暗部屋の暗きに翔る百羽の鳥、千羽の鳥。あれ、あれ、あの新しき命の芽生を、葉ごと枝ごと、啄め、啄め、啄み盡せや、根もとまで。あな妬や。のろ〳〵しや。

招人の二（承香殿女御惡靈）　笑止、笑止、をこがましくも負氣なく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

も、天津日嗣の皇子産まむとや。生るゝものは水ばかりぢや。水ぢや、水ぢや。それ、それ、臭あい、穢あい、尿のやうな水ばつかり、體の內から直流れに流れ出づるぞい。其のやうに水が出ては、手も脚も腹も胴も、枯木のやうに縮んでしまふぞ。笑止、笑止、あはゝゝゝゝ。

招人の三　（顯光惡靈）憎みても、憎みても、憎みても飽き足らぬ。いとしき女の女御が敵、いとしき女の婿が仇。見よ〳〵怨念積んで一夜に生きながら白髮の鬼と化し、死しては魔界の王となり、汝が族の末々迄も、屠り散らして、骨をしやぶり血をすゝらむ。

招人の四　（道隆惡靈）われは中關白が亡靈なり。運拙くして長德の世の疫病に、陰府の人となりぬる口惜しさ殘念さ。おのれ弟の分限にて、小童の昔を忘れ、ようも、ようも、二人の兄を凌がうと企つるよな。わが孫宮の一の宮を帝に立つる誓言せずんば、いつまでも頑に御產屋の邪鬼となつて祟らうぞ。誓言せい、誓言せい。

招人の五　（高明惡靈）億兆の國民の膏血をすゝり、邪曲を扶け、正義を虐げ、天下に荊棘の苦を負はす驕慢の人の子。子を持てる親、兄を持つ弟、夫持てる妻に、猜疑と、嫉妬と、瞋志の炎を焚きつくる驕慢の人の子の命を宿す女を叩はむ。かく云ふは、去ぬる安和の年、罪なうして大宰府の權帥に貶され、西の宮の高明なるぞや。

惡靈共口々に「咀々しや」「憎らしや」「妬ましや」など云ひつゞける。此の間に寢殿は素より、東西廊殿の賀子に迄も僧俗入り亂れて、一入熱心に合掌し、讀經す。散米を務る公卿兩人、混雜の中を踏み分けながら出で來り、升に盛りたる白米を、八方へ雪のやうに振りまき振りまき、邪氣拂ひをなす。忽ち御產屋の方にあたりて、力ある、鋭き呱々の聲上る。倫子、老いたる女房二三人、帳臺を取り圍みて中宮を介抱す。列み居る一同、感喜の涙を催して更に一層祈念を凝らし、一齊に額づく。物怪愈〻妬ましさに堪へざる如く荒れ狂ひ暴り驅ぐ。

招人の一　啄め、啄め。新しき命の孕生を啄み盡せ！

招人の二　笑止や、笑止や、生れるものは水ばかりぢや。水ぢや、水ぢや。あはゝゝゝゝ。

招人の三　咀々しや、咀々しや、憎みても、憎みても、憎みても飽き足らぬ。

招人の四　誓言せい、誓言せい、一の宮を帝に立つる誓言せい。

招人の五　驕慢の人の子の、命を宿す女咀はれむ。

呱々の聲、呪咀の叫び、散米の音、加持祈禱の聲、相混じ相戰ひ、滿場騷然囂然たる中に皇子誕生。夜全く明け放れ、雲散じ霧晴れて、秋の朝の日の光冴え〳〵と照る。物怪次第々々に勢衰へ、招人の五人の女房、悶絕して昏倒す。後產全く濟み、女房胞衣を胞衣桶に收む。

道長　（喜色滿面）皆々喜ばれい。男皇子の御誕生なるぞや。

僧俗一同　おめでたう存じまする。

僧侶陰陽師等經を閉ぢ、壇を下りて、御產屋の方に叩頭す。

道長　あなかしこ、あなかしこ。日本國を領ずべき、瑞相輝く日の皇子を產ませ給うた后の宮はお幸福ぢや。后の宮を女に持つ、此の道長は冥加者ぢや。

と、中宮の御枕邊に叩頭す。

道長　これ大夫、男皇子御誕生の趣を、急ぎ內裏へ聞え上げい。

齊信　畏まり奉る。

道長　皆々大儀でござつた。下へさがつて休息せられい。

齊信以下公卿僧侶退場。女房共立ち上りて、處々の大殿油を掻き消し、燭臺を運びまる。悶絕したる女房達、人々に舁き抱かれて退場。賴通、せや君、威子、嬉子、少納言、小式部兩人の乳人と共に登場。帳臺の下に馳せ寄る。

頼通　おめでたう存じまする。
せや君　威子　おめでたう存じまする。
少納言　小式部　おめでたう存じまする。

頼通、せや君、殿中の簀子を馳せ廻りて盛に散米をなす。
女房一人登場。

女房　申し上げまする。頭中將頼定卿、内裏より御勅使として唯今これへ御出でなさりまする。

勅使頭中將頼定御劍一口を携へて登場、母屋の上座に通る。道長以下畏まる。

頼定　男皇子めでたく御誕生の趣聞し召され、御祝詞の御贈物として御劍一口賜はり候。
道長　忝う存じ奉る。

道長うや〳〵しく御劍を拜受し、女房に渡す。

頼定　して、御母后の宮にも、皇子にも、恙なくあらせ給ふや。
道長　御親子とも至極御安泰、すこやかにあらせられます。
頼定　おゝ其れは重疊、后の宮にはくれ〳〵も御養生に心を配らせ給ふやう、上よりの御綸言にござりまする。
道長　はゝッ、畏り奉る。何卒見らるゝ通りのめでたき趣を、内へ御奏上下されい。
頼定　承知仕る。

頼定退場。遙に公卿達の催馬樂を歌ふ聲きこゆ。

催馬樂　あな尊ふと、今日のたふとさや。古へも、古へも、はれ。古へも、かくやありけむや、けふの尊ふとさ。あはれ、そこよしや、けふのたふとさ。

この間に、女房等庇間に湯槽を運び、おし桶の湯を注ぎ入れて、產湯の用意をなす。鳴弦を務むる六位の地下十人、庭上に南へ向ひて頻に弓弦を鳴らす。頼通、せや君、東西の簀子に立ちて猶も散米をふりまく。

道長、皇子を抱き參らせ、御劍、虎の頭を持てる女房二人を先に立てて、徐々と庇間に出で來る。文章博士廣業、寢殿勾欄の邊に立ちて、史記第一卷五帝本紀「黃帝者小典之子。姓公孫。名曰軒轅。少而神靈。弱而能言。幼而佝齊。長而敦敏。成而聰明。治五氣。藝五種。撫萬民。諸侯咸尊軒轅。爲天子。」の句を三唱す。其の間に產湯全く濟む。

倫子　おゝ、まあ玉のやうなお顏のお美しいこと。
女房　ほんにお可愛らしい皇子樣であらせられます。

道長再び皇子を抱きて立ち上る。皇子聲を上げて頻に泣きたまふ。

道長　（微笑みつゝ、ぢッと皇子の泣顏を見入り）おゝお勇ましいお泣き聲ぢや。その御聲が曆に取つての此上なき寶。何、何と仰せらるる。うむ、宜いわ、宜いわ。何事も此の祖父が心得て居り申すわ。あはゝゝゝゝ。

道長欣然として大笑す。殿上地下の人々跪坐して敬禮す。

（幕）

刺青

其れはまだ人々が「愚」と云ふ貴い德を持つて居て、世の中が今のやうに激しく軋み合はない時分であつた。殿樣や若旦那の長閑な顏が曇らぬやうに、御殿女中や華魁の笑ひの種が盡きぬやうにと、饒舌を賣るお茶坊主だの幇間だのと云ふ職業が、立派に存在して行けた程、世間がのんびりして居た時分であつた。女定九郎、女自雷也、女鳴神、――當時の芝居でも草雙紙でも、すべて美しい者は强者であり、醜い者は弱者であつた。誰も彼も稟つて美しからむと努めた揚句は、天稟の體へ繪の具を注ぎ込む迄になつた。芳烈な、或は絢爛な、線と色とが其の頃の人々の肌に躍つた。

馬道を通ふお客は、見事な刺青のある駕籠舁を選んで乘つた。吉原、辰巳の女も美しい刺青の男に惚れた。博徒、鳶の者はもとより、町人から稀には侍なども入墨をした。時々兩國で催される刺青會では參會者おの〳〵肌を叩いて、互に奇拔な意匠を誇り合ひ、評しあつた。

清吉と云ふ若い刺青師の腕きゝがあつた。淺草のちやり文、松島町の奴平、こんこん次郎などにも劣らぬ名手であると持て囃されて、何十人の人の肌は、彼の繪筆の下に紺地となつて擴げられた。刺青會で好評を博す刺青の多くは彼の手になつたものであつた。達磨金はぼかし刺が得意と云はれ、唐草權太は朱刺の名手と讃へられ、清吉は又奇警な構圖と妖艶な線とで名を知られた。

もと豐國國貞の風を慕つて、浮世繪師の渡世をして居たゞけに、刺青師に墮落してからの清吉にもさすが畫工らしい良心と、鋭感とが殘つて居た。彼の心を惹きつける程の皮膚と骨組みとを持つ人でなければ、彼の刺青を購ふ譯には行かなかつた。たま〳〵描いて貰へるとしても、一切の構圖と費用とを彼の望むがまゝにして、其の上堪へ難い針先の苦痛を、一と月も二た月もこらへねばならなかつた。

この若い刺青師の心には、人知らぬ快樂と宿願とが潜んで居た。彼が人々の肌を針で突き刺す時、眞紅に血を含んで脹れ上る肉の疼きに堪へかねて、大抵の男は苦しき呻き聲を發したが、其の呻きごゑが激しければ激しい程、彼は不思議に云ひ難き愉快を感じるのであつた。刺青のうちでも殊に痛いと云はれる朱刺、ぼかしぼり、――それを用ふる事を彼は殊更喜んだ。一日平均五六百本の針に刺されて、色上げを良くする爲め湯へ浴つて出て來る人は、皆半死半生の體で清吉の足下に打ち倒れたまゝ、暫くは身動きさへも出來なかつた。その無殘な姿をいつも清吉は冷やかに眺めて、

「嘸お痛みでがせうなあ」

と云ひながら、快さゝうに笑つて居る。

意氣地のない男などが、まるで知死期の苦しみのやうに口を歪め齒を喰ひしばり、ひい〳〵と悲鳴をあげる事があると、彼は、

「お前さんも江戸つ兒だ。辛抱しなさい。――この清吉の針は飛び切りに痛えのだから」

かう云つて、涙にうるむ男の顏を横目で見ながら、かまはず刺つて行つた。また我慢づよい者がグツと膽を据ゑて、眉一つしかめず悚へて居ると、

「ふむ、お前さんは見掛けによらねえ突つ張者だ。――だが見なさい、今にそろ〳〵疼き出して、どうにもかうにもたまらないやうにならうから」

と、白い齒を見せて笑つた。

彼の年來の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込む事であつた。その女の素質と容貌とに就いては、いろ〳〵の

注文があつた。嘗に美しい顔、美しい肌とのみでは、彼は中々滿足する事が出來なかつた。江戸中の色町に名を響かせた女と云ふ女を調べても、彼の氣分に適つた味はひと調子とは容易に見つからなかつた。まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年は空しく憧れながらも、彼はなほ其の願ひを捨てずに居た。

丁度四年目の夏のとあるゆふべ、深川の料理屋平清の前を通りかゝつた時、彼はふと門口に待つて居る駕籠の簾のかげから眞つ白な女の素足のこぼれて居るのに氣がついた。鋭い彼の眼には、人間の足はその顏と同じやうに複雜な表情を持つて映つた。その女の足は、彼に取つては貴き肉の寶玉であつた。拇指から起つて小指に終る纖細な五本の指の彎ひ方、繪の島の海邊で獲れるうすべに色の貝にも劣らぬ爪の色合ひ、珠のやうな踵のまる味、清冽な岩間の水が絶えず足下を洗ふかと疑はれる皮膚の潤澤。この足こそは、やがて男の生血に肥え太り、男のむくろを蹈みつける足であつた。この足を持つ女こそは、彼が永年たづねあぐんだ、女の中の女であらうと思はれた。清吉は躍りたつ胸をおさへて、其の人の顏が見たさに駕籠の後を追ひかけたが、二三町行くと、もう其の影は見えなかつた。

清吉の憧れごゝちが、激しき戀に變つて其の年も暮れ、五年目の春も半ば老い込んだ或る日の朝であつた。彼は深川佐賀町の寓居で、房楊枝をくはへながら、綿竹の濡れ縁に萬年青の鉢を眺めて居ると、庭の裏木戸を訪ふけはひがして、袖垣のかげから、つひぞ見馴れぬ小娘が這入つて來た。

それは清吉が馴染の辰巳の藝妓から寄こされた使の者であつた。

「姐さんから此の羽織を親方へお手渡しゝて、何か裏地へ繪模樣を畫いて下さるやうにお賴み申せつて……」

と、娘は鬱金の風呂敷をほどいて、中から岩井杜若の似顏畫のたいに包まれた女羽織と、一通の手紙とを取り出した。

其の手紙には羽織のことをくれ〳〵も賴んだ末に、使の娘は近々に私の妹分として御座敷へ出る筈故、私の事も忘れずにこの娘も引き立てゝやつて下さいと認めてあつた。

「どうも見覺えのない顏だと思つたが、それぢやお前は此の頃此方へ來なすつたのか」

かう云つて清吉は、しげ〳〵と娘の姿を見守つた。年頃は漸う十六か七かと思はれたが、その娘の顏は、不思議にも長い月日を色里に暮らして、幾十人の男の魂を弄んだ年增のやうに物凄く整つて居た。それは國中の罪と財との流れ込む都の中で、何十年の昔から生き代り死に代つたみめ麗しい多くの男女の、夢の數々から生れ出づべき器量であつた。

「お前は去年の六月ごろ、平清から駕籠で歸つたことがあらうがな」

かう訊ねながら、清吉は娘を緣へかけさせて、備後表の臺に乘つた巧緻な素足を仔細に眺めた。

「えゝ、あの時分なら、まだお父さんが生きて居たから、平清へもたび〳〵まゐりましたのさ」

と、娘は奇妙な質問に笑つて答へた。

「丁度これで足かけ五年、已はお前を待つて居た。顏を見るのは始めてだが、お前の足にはおぼえがある。――――お前に見せてやりたいものがあるから、上つてゆつくり遊んで行くがいゝ」

と、清吉は暇を告げて歸らうとする娘の手を取つて、大川の水に臨む二階座敷へ案内した後、卷物を二本とり出して、先づ其の一つを娘の前に繰り展げた。

それは古の暴君紂王の寵妃、末喜を描いた繪であつた。瑠璃珊瑚を鏤めた金冠の重さに得堪へぬなよやかな體を、ぐつたり勾欄に靠れて、羅綾の裳裾を階の中段にひるがへし、右手に大杯を傾けながら、今しも庭前に刑せられんとする犧牲の男を眺めて居る妃の風情と云ひ、鐵の鎖で四肢を銅柱へ縛ひつけられ、最後の運命を待ち構へつゝ、妃の前に頭をうなだれ、眼を閉ぢた男の顏色と云ひ、物凄い迄に巧に描かれて居た。

娘は暫くこの奇怪な繪の面を見入つて居たが、知らず識らず其の瞳は輝き其の唇は顫へた。怪しくも其の顏はだん〳〵と妃の顏に似通つて來た。娘は其處に隱れたる眞の「己」を見出した。

「この繪にはお前の心が映つて居るぞ」

かう云つて、清吉は快げに笑ひながら、娘の顏をのぞき込んだ。

「どうしてこんな恐ろしいものを、私にお見せなさるのです」

と、娘は青褪めた額を擡げて云つた。

「この繪の女はお前なのだ。この女の血がお前の體に交つて居る筈だ」

と、彼は更に他の一本の畫幅を展げた。

それは「肥料」と云ふ畫題であつた。畫面の中央に、若い女が櫻の幹へ身を倚せて、足下に累々と斃れて居る多くの男たちの屍骸を見つめて居る。女の身邊を舞ひつゝ凱歌をうたふ小鳥の群、女の瞳に溢れたる抑へ難き誇りと歡びの色。それは戰の跡の景色か、花園の春の景色か。それを見せられた娘は、われとわが心の底に潛んで居た何物かを、探りあてたる心地であつた。

「これはお前の未來を繪に現はしたのだ。此處に斃れて居る人達は、皆これからお前の爲めに命を捨てるのだ」

かう云つて、清吉は娘の顏と寸分違はぬ畫面の女を指さした。

「後生だから、早く其の繪をしまつて下さい」

と、娘は誘惑を避けるが如く、畫面に背いて疊の上へ突俯したが、やがて再び唇をわなゝかした。

「親方、白狀します。私はお前さんのお察し通り、其の繪の女のやうな性分を持つて居ますのさ。――だからもう堪忍して、其れを引つ込めてお呉んなさい」

「そんな卑怯なことを云はずと、もつとよく此の繪を見るがいゝ。それを恐ろしがるのも、まあ今のうちだらうよ」

かう云つた清吉の顏には、いつもの意地の惡い笑ひが漂つて居た。然し娘の頭は容易に上らなかつた。襦袢の袖に顏を蔽うていつまでも突俯したまゝ、

「親方、どうか私を歸しておくれ。お前さんの側に居るのは恐ろしいから」

と、幾度か繰り返した。

「まあ待ちなさい。己がお前を立派な器量の女にしてやるから」と云ひながら清吉は何氣なく娘の側に近寄つた。彼の懷には嘗て和蘭醫から貰つた麻睡劑の壜が忍ばせてあつた。

日はうらゝかに川面を射て、八疊の座敷は燃えるやうに照つた。水面から反射する光線が、無心に眠る娘の顏や、障子の紙に金色の波紋を描いてふるへて居た。部屋のしきりを閉て切つて刺青の道具を手にした清吉は、暫くは唯恍惚としてすわつて居るばかりであつた。彼は今始めて女の妙相をしみ〴〵味はふ事が出來た。その動かぬ顏に相對して、十年百年この一室に靜坐するともなほ飽くことを知るまいと思はれた。古のメムフイスの民が、莊嚴なる埃及の天地を、ピラミツドとスフインクスとで飾つたやうに、清吉は清淨な人間の皮膚を、自分の戀で彩らうとするのであつた。

やがて彼は左手の小指と無名指と拇指の間に挿んだ繪筆の穗を、娘の背にねかせ、その上から右手で針を刺して行つた。若い刺青師の靈は墨汁の中に溶けて、皮膚に滲むだ。燒酎に交ぜて刺り込む琉球朱の一滴々々は、彼の命のしたゝりであつた。彼は其處に我が魂の色を見た。

いつしか午も過ぎて、のどかな春の日は漸く暮れかゝつたが、清吉の手は少しも休まず、女の眠りも破れなかつた。娘の歸りの遲きを案じて迎ひに出た箱屋迄が、

「あの娘ならもう疾うに歸つて行きましたよ」

と云はれて追ひ返された。月が對岸の土州屋敷の上にかゝつて、夢のやうな光が沿岸一帶の家々の座敷に流れ込む頃には、刺青はまだ半分も出來上らず、清吉は一心に蠟燭の心を掻き立てゝ居た。

一點の色を注ぎ込むのも、彼に取つては容易な業でなかつた。さす針、ぬく針の度毎に深い吐息をついて、自分の心が刺されるやうに感じた。針の痕は次第々々に巨大な女郎蜘蛛の形象を具へ始めて、再び夜がしらしらと白み初めた時分には、この不思議な魔性の動物は、八本の肢を伸ばしつゝ、背一面に蟠つた。

春の夜は、上り下りの河船の櫓聲に明け放れて、朝風を孕んで下る白帆の頂から薄らぎ初める霞の中に、中洲、箱崎、靈岸島の家々の甍がきらめく頃、清吉は漸く繪筆を擱いて、娘の背に刺り込まれた蜘蛛のかたちを眺めて居た。その刺青こそは彼が生命のすべてゝあつた。その仕事をなし終へた後の彼の心は空虛であつた。

二つの人影は其のまゝ稍ゝ暫く動かなかつた。さうして、低く、かすれた聲が部屋の四壁にふるへて聞えた。

「己はお前をほんたうの美しい女にする爲めに、刺青の中へ己の魂をうち込んだのだ、もう今からは日本國中に、お前に優る女は居ない。お前はもう今迄のやうな臆病な心は持つて居ないのだ。男と云ふ男は、皆なお前の肥料になるのだ。……」

其の言葉が通じたか、かすかに、絲のやうな呻き聲が女の唇にのぼつた。娘は次第々々に知覺を恢復して來た。重く引き入れては、重く引き出す肩息に、蜘蛛の肢は生けるが如く蠕動した。

「苦しからう。體を蜘蛛が抱きしめて居るのだから」

かう云はれて娘は細く無意味な眼を開いた。其の瞳は夕月の光を增すやうに、だん〳〵と輝いて男の顏に照つた。

「親方、早く私に背の刺青を見せておくれ、お前さんの命を貰つた代りに、私は嘸美しくなつたらうねえ」

娘の言葉は夢のやうであつたが、しかし其の調子には何處か鋭い力がこもつて居た。

まあ、これから湯殿へ行つて色上げをするのだ。苦しからうがちッと我慢をしな」

と、清吉は耳元へ口を寄せて、勞はるやうに囁いた。

「美しくさへなるのなら、どんなにでも辛抱して見せませうよ」

と、娘は身内の痛みを抑へて、强ひて微笑んだ。

「あゝ、湯が滲みて苦しいこと。……親方、後生だから私を打つ捨つて、二階へ行つて待つて居てお呉れ、私はこんな悲慘な態を男に見られるのが口惜しいから」

娘は湯上りの體を拭ひもあへず、いたはる清吉の手をつきのけて、激しい苦痛に流しの板の間へ身を投げたまゝ、慄される如くに呻いた。氣狂じみた髮が惱ましげに其の頰へ亂れた。女の背後には鏡臺が立てかけてあつた。眞つ白な足の裏が二つ、その面へ映つて居た。

昨日とは打つて變つた女の態度に、清吉は一と方ならず驚いたが、云はれるまゝに獨り二階に待つて居ると、凡そ半時ばかり經つて、女は洗ひ髮を兩肩へすべらせ、身じまひを整へて上つて來た。さうして苦痛のかげもとまらぬ晴れやかな眉を張つて、欄干に靠れながらおぼろにかすむ大空を仰いだ。

「この繪は刺青と一緒にお前にやるから、其れを持つてもう歸るがいゝ」

かう云つて清吉は卷物を女の前にさし置いた。

「親方、私はもう今迄のやうな臆病な心を、さらりと捨てゝしまひました。――お前さんは眞先に私の肥料になつたんだねえ」

と、女は劍のやうな瞳を輝かした。その耳には凱歌の聲がひゞいて居た。

「歸る前にもう一遍、その刺青を見せてくれ」

清吉はかう云つた。

女は默つて頷いて肌を脫いた。折から朝日が刺青の面にさして、女の背は燦爛とした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com